

不思議の国のアリスたち

ー南フランスの一軒家に集まる5人の未亡人たちの物語りー

小畑リアンヌ

- | | | |
|-----|-----------|----|
| 1、 | 信子の場合 | |
| 2、 | 義美の場合 | |
| 3、 | 礼子の場合 | |
| 4、 | 智恵の場合 | |
| 5、 | 仁子の場合 | |
| 6、 | 到着 | 53 |
| 7、 | パリで | 64 |
| 8、 | 礼子の問題 | 76 |
| 9、 | トゥールーズの街へ | |
| 10、 | 智恵の決断 | |
| 11、 | 仁子の想い | |
| 12、 | 礼子からの返事 | |



第六話、到着

最初に到着したのは、義美だった。

何度かメールで打診をしてきたがはっきり到着日どころか滞在するのかさえも言わず何週間が過ぎたある日、仁子は日曜の朝の8時に枕元に置き忘れたケイタイのスエーデンのダンス音楽でたたき起こされた。

「もしもし、仁子さんよね、ほらこの間から何度かメールした義美です」一方的に義美は朝の挨拶もなく用件だけを伝えた。

「4 日後の午後 6 時に K L M の X X 便で着きますのでよろしく。契約書はその時でいいかしら」

仁子は釈然としない頭の中でまだ自分の名前を言われている相手が誰なのか聞き取れないまま、「そうですか、じゃあ空港でお待ちしています」と答えていた。

メールの広告では迎えはしないと書いたはずだが、自分自身すっかりそのことを忘れていた。

「じゃあ、よろしくね。今そっちのお天気はどう？水着を持っていった方がいいかしら。これケイタイなの。まあいいわ、自分で決めるわ」それだけを一方的に言われ切られた。携帯で掛けてくるのは固定電話よりぐんと価格が上がる。まだフランスのような低価格の固定電話システムがないのだろう。

ベッドから起き上がった仁子は昨日飲みすぎたことを後悔した。いったい誰が連絡してきたのかはつきり理解出来なかった、一応何時につくかはメモったのだけど。これでは分からない。K L M で来ると言ったから、日本からアムステルダムで乗りついてくる信子とバーミンガムからの義

美がいる。信子は来週到着と聞いていた筈、変更になったのかも知れない。時間的にも信子の方が可能性が高い。義美のほうはというと何度か部屋の状態、気候、トゥールーズまでの距離や料金など散々質問してきては考えますと言ったり、夕食付きでなら泊りたいと言ったり、やはり行かないと行ってきたりで散々振り回され要領が得なかったが、彼女の可能性もある。もし義美としたらイギリスから掛けてきたことになるので、零時を示すグリーニッチのあるイギリスではサマータイムはヨーロッパのように合わせて儲けていたが、フランスのように一年中を通じて時間を早めていないからあの電話は朝7時に掛けて来たことになる。日曜日にこんな朝早く電話を掛けてよこすだろうか。一抹の不安は残ったが。まあ、直接空港に迎えに行くしかないとおきらめることにした。

怒涛のような悲しみを体験したものにとってもう何に対しても動揺することは無くなっていた。それがいまの仁子であった。

＊

午後6時と言うのはいくらこんな田舎町でも会社帰りの車であふれている、しかも車社会のこの町も交通網は整理され、パリのように市内を取

り巻く無料高速道路があるからだろう。以前は110KM出せたが、4年も前より最近のCO₂削減にあわせて90KMに最高時速が落されていた。

ブラニャック空港、トゥールーズからわずか15Kmの空港はエアバス産業、宇宙開発、コンピューター産業の急激な発達の影響で急遽空港自体が3倍にも膨れ上がっていた。工事につぐ工事、不況と言いながらもこの街の産業にはあまり影響なく、工事は地方を吸収して進められていく。仁子は新しいパーキング場の入り口が見つからず、空港内の巨大な建物には10分ほど遅れて入った。普通どんな飛行機も予定通り到着したとしても空港内まで出るのに少なくとも15分ぐらいは掛かるだろうと高をくっていたが、以外にもエールフランスと提携しているKLMはスムーズに固定の場所が確保され乗客は何の遅れもなく出てきていた。

あわてて入った仁子は後からスーツケースを引いた背の高い、まるでスチワードスを思い出させる紺色に赤いベルトで統一されたパンツルックの女性に声掛けられた。

「私が義美です」身長168cmのすらっとした女性は仁子を見下ろした。

「すみません、仁子です。遅くなって」仁子はそう言うと手を出してスーツケースを持とうとした。

「いいわ、これは大事にしている鞆だから汚したくないの。こっちを持ってくださる」黒い機内持ち込みの重い鞆を差し出された。

「重いでしょう、20kgまでだから本とかかさばるものはそっちに入れたのよ。それに後で少し息子が荷物を車で運んでくれる予定になっているから。でも、お部屋に入るかしら」

義美にあてがった部屋はミシェルが病気になる以前から出て行った娘の部屋を絨毯のみを替え、整理整頓した12平方の東側だった。

「入ると思いますが、それより今夏なので昼間はよろい戸を閉めないと少し暑いかもしれません」

ああ、この人が義美なのか。と、仁子は想像していた以上だと思った。

「あら、もう同居人になるのだから、敬語はやめましょうね」と意外な言葉が彼女の口から出た。敬語ではない丁寧語だがやはり共同生活には

邪魔になる。ただこの場合最初から友達づきあいとは行かないし、大家と住人という風にもしたくない。まあそれは徐々に考えればいい。

そういえば他の誰とも契約書の書類の話はしなかったが、この人とは最初からその話が出ていた。要するに向こうは強くはっきり出てきたわけだ。それはかまわないと仁子は思った。

飛行場を出るとすぐに高速に入っていく。家までは25分ぐらい。初めて話す感じでもないが、顔を見て話すのとはわけが違う。しかも声と言うものは顔が最初の印象として残るので声は後でついてくる。まるで雷のように一瞬光り、その何秒か後に音が鳴る。人の顔は不思議なものだと仁子は思った。一瞬見た顔は声とあっていなかった。彼女の場合全体的に綺麗だが、顔はどこか一点そう鼻が上を向いていて少しまとまりに掛けた。仁子は日本で油絵をしていたし、フランスへ来て最初のころは美術大学にも通った経験があるので彼女の顔を描けといわれれば、パリのモンマルトルの絵描きとは行かないまでも描いて見せることはできる。

車の中で、義美は外の景色よりも長袖を着てきたことをしきりに話した。ロンドンを出たときは雨でじとじとしていたと。でもここは空港に着い

たとたん30度は超えている夏らしい気温に驚いたこと。息子がミディピレネ運河の近くのマンションのワンルームを借りたことなどを話した。運転している仁子は軽く返事をしたが、時折自分から話しかけたことは一応風景のことを簡単に要約しただけだった。

今通っている道路の右側にはポールリケと言う人が14世紀に作ったボルドーとトゥールーズを結ぶ商業ためのペニッシュ用の運河と言うように。このロカードと呼ばれる高速道路が旧市街を囲み右側は市内で左側が郊外になっていることなど。そして20分も走ったところ右側にシテドエスパースと呼ばれるエキスポランドのようなところにフランス宇宙衛星の、本当はグイヤンというフランス領土から発射されるアリアンヌVの模型が作られ飾られている説明をしたが、義美は殆ど興味がないと言う風でもあった。

「ここって骨董店ってあるかしら」急に義美は話題を変えた。

「えっ、あると思いますが、、、今は夏だから閉まっているのじゃないかしら」ぎこちなく普通の言い方に変えた。

「あら、残念。私ね古いものが好きなのよ。南仏はイギリス以上にあると期待してきたのに」まるで目的がそれのみだと言わんばかりに彼女は残念がった。

「じゃあ、明日アルビの町へ行く前に一件寄りますか」ようやく仁子是一件そういえば骨董とは行かないまでもこちらでは古いものを持ち込んで売ってもらう（トロコント）と言うシステムを思い出した。あそこなら彼女も気に入るかもしれない。トロコントの話を具体的にしだすと、

「アルビってどこ」今度は人の話も聞かず急に別のことを聞いてくる。

「アルビはほら、トゥールーズ・ロートレックというムランルージュを描いた画家で、確か小説の“月と6ペンス”と言う題の、、、」

「ああ、知ってるわ。私本を読むのが好きだから。でも遠いんじゃない？それに追加料金を取られるんじゃない、、、」

「いえ、これは私のサービスですから。市内見学とここはこれから一緒に住む人に見せてあげたくて」本当は来週二人来るときに同時に連れて行きたがったが、その方が一度に済む。彼女が今週来るとは想像していなかったのも、彼女たちが到着するまでのやることが思い浮かばない。部屋を貸すぐらいでここまですることもないが、これは人間関係の中で

観光は人を知るのにはいいかもしれないと仁子は貸すと決めたその日から考えていた。だが何の連絡もなく予定より早まった人をここまで親切に迎えることもないがまあ仕方がないとあきらめることにした。「予定と言うものは合っていない様な物」フランスのことわざをふと思い出した。そしてもう一つ。「トゥールーズの15分」と言う言い回しはこちらの人が必ず招待されても15分ぐらいは遅れてやってくることから来ている。今日の私はそれだわと自分に言い聞かせた。彼女は迎えに遅れたことを言葉の節でちくりと攻めたからだ。

部屋に案内すると、鞆を広げ、シャワーを浴びたいと台所で冷たい麦茶を用意していた仁子に義美は聞こえるぐらいの大きな声で言った。

「どうぞ」とは言ったが、もう麦茶は注いでいた。さっきお茶はどうですかと訊ねたらほしいと言ったのはずの人が部屋に入るともう別のことにこだわっている。

仁子はこのとき初めて、彼女と本当に契約していいのだろうかと不安がよぎった。

＊

アルビに到着したのは車を走らせてから1時間ぐらいたろうか。仁子はこのタルヌ県には小高い山などがあり、静かに流れるタルヌ川もあり昔からの情緒ある風景を説明している間、義美はときどきカメラを向けてシャッターを切っていたが、

「私ね、イギリスの方が好きなのよ。フランス人て昔から苦手だったのよね。ほら、イギリス人は親切だけど、、、ね」

「まあ、人それぞれだから、一概には言えないのじゃないかしら」ようやく仁子もこのまま彼女に主導権を奪われてもいけないと意識し始めた。文章にするとかなりきついことも書けるけど、仁子は内心では人には弱い自分を知っていた。

有料駐車場には入らず、2周して路上のパーキングの空を見つけ、簡単に縦列駐車をすると、義美は驚いて見せた。そこから5分ほど歩き、レンガで造られた教会では世界一のサン・セシル教会を見せると義美はやっとその規模に驚いて、仁子にしていた態度を少し和らげ始める。その教会の近くにはロートレック美術館があった。貴族の名門の子として生まれたロートレックが骨の病気で身長が伸びず、アルコールに溺れなが

ら描いた作品に仁子は始めてきたとき心が動かされたことを思い出す。
義美が美術館を見学している間何度も入ったことがあるので仁子は待つ
間その近くにあるレストランでビールを注文した。

「アン、ドウミ、シルブプレ」250 c c を注文するとき特別のビールを
指定しない限り、カウンターの樽のビールが注がれる。その方が瓶ビー
ルよりはるかに冷たくておいしい。仁子は運転しているのにも関わらず
よく一杯のワインぐらいは昼食時は飲んでしまう。フランスでは血液の
中のアルコール量が一定の限度までならば飲んでもかまわないことにな
っている。それは男性では、体重に応じてではあったが一般にワイング
ラスで2杯分、女性は1杯半。さすがワインの国で飲めば運転を控える
なんて法律ができてしまえば経済にまでひびく。ましてやフランス人自
体が益々ワインを飲まなくなっている時代でもある。日本はその逆
ではないだろうか。中国もワイン輸出量が増え続けている。仁子は本当
はロゼの冷えたワインが飲みたかったがさすがに昼間から食事中でない
ときは何故か気がとがめた。

案内で疲れた仁子は義美が出てきてもすぐ分かる一番前の席を取り、先ほどインフォメーションで手に入れたパンフレットに目を通す時間ができたことに満足していた。

「ALBI LABEL VIE アルビ、らベル・ヴィ」2009年版の日本語パンフレットにはそう書かれていた。カタカナとひらがなを混ぜた書き方、いったい誰が訳したのか気になった。らベル・ヴィには意味がある。ちょっとした洒落が使われているのに誰がわかるだろうか。ふと仁子はそう思った。LABELとフランス語のパンフレットには書かれていたが英語がわざと使われている。それは品質保証の意味の英語とフランス語のLABELL「美しい」という意味を兼ね備えているそんな「生活を」と言うことだが、、、ふと仁子は、

ビールの程よい酔いも混じって変っていくものの中で一人だけ取り残されるような思いに取られる。

白いワイシャツに黒いエプロンを着た耳の長い給仕がポケットから懐中時計を出し時間を気にしながら彼女をちらっと見た後、奥のうほうに入ってしまった。



第七話、パリで

信子がパリに着いたのは朝一番早い便だった。カタカタと色々な洗剤などが入った大きな荷物車を押しながら掃除夫らしい人が横切る。シャルルドゴール空港にはまだカフェを飲む喫茶店ですら開いていなかった。人影がまばらな空港内は寂しい。ふとそう思った。疲れて着いたパリ、荷物を取り税関を出るとフラッシュをたかれたかのように待ち受ける数々の人たち、その中にはかつて信子が愛した人の姿はない。家族、友人で抱きしめあっている人たちを横目でその場を一人通り過ぎる。

ふっと空港内から出たときため息が出た。何年ぶりだろうこの地を踏むのは。

そのまま直通で空港内で乗り換えてトゥールーズまで行くこともできたが、信子は一日をサンジェルマン近くの三ツ星ホテルに予約をした。オ

一ナーが日本びいきで昔パリで働いていたころよくここを友人に紹介したことがある。まさか自分が今日ここに泊るとは想像もしていなかった。信子にはやらなければいけないことがあった。それは3区に今も住んでいる義母に会うためと訪れたいある場所のための時間を割いたのだ。

真夏のせいか逆にパリには華やかさが欠けている。この時期パリジャンは海や山にヴァケーションに行き、わずか残った人と観光客が同じぐらいの人数になっている。セーヌ河沿いにはパリ・プラージュと呼ばれる浜辺が簡易で作られ大勢の人が何台ものトラックで運ばれた人工の砂の上で水着になり寝そべっている。その横をリボリ通りを過ぎポンヌフからのバスに乗った。

何年ぶりで会うだろうか、ふと一抹の不安が湧いてきた。あれから連絡を怠ってきた。毎年のようにクリスマスにはカードを送ったが、彼女から返事が来たのは3年前だった。

サン・ミッシェルのカルチエラタンに足を踏み入れる。賑わっていたがなぜか自分の入れるスペースはなくなってしまった感に襲われる。そこから裏側の狭い道を入っていくと幅の狭い建物がひしめき合っている。

その中のブルーのペンキで何度も塗り返されたドアに手を掛けギーと身体ごと押し中に進むと庭があり奥の方にもう一つ別の木肌が出たままの壊れかけたドアがあった。

「ボンジュール、ここにジョリという名のマダムが住んでいると思うのですが、、、」若いアラブ系のコンシェルジュに、ドアに設けられた小さな窓口を開けて声を掛ける。

「キ？（誰？）」とまるで親切のかけらもない返事をされてしまった。彼女は自分の前に立つ東洋人を無視して小さな窓を閉めようとする。

「アパート何番に住んでいるマダムです。私は義娘で、、、」無理やり窓を抑えて押し切ってしゃべった。久しぶりのフランス語だが、彼女よりまともに話せる。

髪を薄茶に染めた、まるで品のひとつも感じられないコンシェルジュは起きたばかりだと言わんばかりにぶっきらぼうにこう答えた。だが、相手が自分よりフランス語が上手いと判ると態度を変えて、あなたが言うマダムは今はいない。三ヶ月前に大通りで車に跳ねられて亡くなった。

警察が来て彼女の部屋の荷物はすべて片付けられた。彼女の部屋は検査されたが身内がいるなんて知らなかったから、すべて残った分はこちらが廃棄した。悪く思わないでほしい。何故もっと前に彼女に連絡しなかったのか、へえ、あなたは日本人なの。でも一応義娘（むすめ）でしょう。70歳以上の人を一人でほって置くなんて人間のやることじゃない。アルジェリアじゃ誰もこんな仕打ちはしないわよ。今度は彼女は向こう側からこちらの落ち度を攻めている。もし何か言いたいことがあれば警察に届けてあるから行けばいい。もしかしたら老女の遺品もまだ残っているかも知れない。じゃあ、私は忙しいからと小さな紙切れを渡されてピシッと窓を閉められた。

信子は呆然とした。病気で死んだのではなかったことだけがせめてもの救いだろうか。

その日、ホテルに荷物を置いて休む暇もなく、紙切れに書かれていた住所の警察署へ行き、こちらの事情を話し、交通事故の事情を訊ね、これから滞在するトゥールーズの住所も渡した。もしかしたら公証人からあなたに連絡が入るかも知れないからと。それにしても今日で二人目だ

と同じ人のことを訪ねてきたのはどちらとこちらの様子を伺いながらそれでも警察官は事務的に応対した。

いったい誰が尋ねてきたというのだ。しかも今日と彼は言った。信子はその足でメトロに乗りモンマルトルの墓に出かけた。近くでクロワッサンとジュースとカフェオーレだけの簡単な朝食をやっと口にすることができた。その後、花屋に寄り白いバラと黄色いバラをブーケにしてもらった。花屋は無料だからとユーカリの葉をつけようとしたが、信子は何も要らないと断る。ユーカリの匂いは大嫌いだ。ユリの匂いもきつすぎる。本当はバラも好きではなかったが、手に白いマーガレットの花を抱えて義母に初めて会いに行ったとき、ドアが内側に開けられ、出てきたその人に挨拶のキスよりも先に、

「あら、マーガレット？私はどちらかと言うと黄色いバラの花のほうが好きなのよ」と花を受け取りながらそう言って部屋の中に入れてもらったことを思い出した。

白いバラは彼のため、そして黄色は義母に、、、18区にあるモンマルトルの墓は今は観光客の方が大勢いる。マロニエ、菩提樹、このてがしら

と言う垣根によく使われる杉に近い木等で覆われた雄大なる敷地には有名な作者、歌手政治家たちが眠っていた。何度来ても場所を迷ってしまう。着替える暇もなくここに着た信子ではあったが黒いパンタロンに淡いベージュのシルクのノースリーブは静かな雰囲気合っていた。

小さな墓石には「親愛なるジュリアン・ジョリ永久にここに眠る。母ジョセフィンヌ」と書かれている。ヨーロッパでは名前の頭文字と苗字の頭文字を一緒にすることが多々ある。たとえばブリジット・バルドーのBB、クロディア・カルディナーレのCCと言う風に。自分の夫はJJであった。母も同じ頭文字のJJ。今回その横にもう一つの名前が刻まれた墓石「ジョセフィンヌ・ジョリ 2009年X月X日ここに眠る」が記されていた。誰の手によって、信子は警察がこんなことをするはずはない。と確信していたから誰なのか検討もつかなかった。

そしてそこには今訪れたばかりと思える大きなマーガレットの花束が無造作に置かれていた。

覚悟していたとはいえ悲しみから逃れられるはずもない。ひとりで居るときは泣いた、声をあげて泣いた。それこそ毎日のように泣いた。

涙がたまりそれは池になり、やがて川になり、海のように大きく広がっていった。

抜け切れない、泳げない信子はもがいた。自分の涙で溺れるなんて真っ平だわ。

「リーン」「リーン」「リーン」

「マダムノブコ、ボンジュール、今7時です。ああ、それから昨夜、ムッシュ、タケイからお電話がありました。今日中に連絡がほしいそうです」

「えっ、メルシ」

やっと、信子は自分が今どこにいるか、ベッドの硬さの違い、受話器の横のアンチック風のランプを見て気付いた。

「マダム ノブコだなんて、苗字と間違えているのだわ。ここはパリのよ。武井さんが何の用なのかしら。出発前に彼とはもう一度会って話したはずなのに。まあいいわ。それより、11時の便に間に合わなくなっ

てしまうわ」自分に言い聞かせながらもう一度、「メルシ、朝食はどこで取れるかしら」

「マダム、一階のサロンの横のサラモンジェにテーブルを用意しています」

「そう、メルシボクー」

「どういたしまして、マダムノブコ」信子のフランス語は完璧だった。

＊

オルリー空港はパリ近郊の南側の空港であった。エールフランス航空会社がそこにもありパリートゥールーズ間を独占に近い形で1時間ごとに飛んでいた。初めて信子はオルリースードから飛び立つ。R E R線と呼ばれる電車から乗りついた空港までのシャトル用の電車に乗った信子は170 c mは越したハーフの娘を連れてスーツケースを持っている日本女性に声を掛けられた。

「のぶこさ、、ん、あなた、信子さんよね。本当にお久しぶり。覚えて
いるかしら。ほら智恵よ。こっちはミレイユ。私の娘」黒一色に身を包
んだ智恵は微笑んで、信子の前に座ろうとした。

「すみません、パリには知り合いは、、でも、ああ思い出したわ。智恵
さん。まだいたのね。日本に帰っていると思っていたわ」

「そのつもりだったけど、だけど今もこうしてフランスに住んでいるの。
でも今日は日本へ少し帰るのよ。あなたも？」

信子は昨日フランスに着いたことを説明し、これからトゥールーズへ向
かうことも少し簡単に話した。昔信子と智恵はアリアンセ・フランセー
ズというフランス語学校で知り合った。何ヶ月かクラスが一緒になった
ときクラスが終わると調度裏側にある小さなカフェでよくエキスプレッ
ソと一緒に飲んだことがある。もう二人ともエキスプレッソを殆ど飲めな
くなってしまっている。

智恵は以前はどこか自分の前にいる女性に打ち解けることはなかったの
に、なぜか何十年ぶりにあう信子に疑心の気持ちもなく素直に今失業に

なり、これからの生活を真剣に考えていること少し話した。智恵は会社をやめさせられたのを機会に二週間娘と日本へ行こうと決めた。安い飛行機会社を探したら台湾空港がオルリーウエストつまりオルリー空港の西側から出ていることが分かった。この先、日本にはそう簡単には帰れないと覚悟した智恵は今回日本にいる老いた母のことも気になったので日本へ帰ることを瞬時に決めた。そしてこれからのことはフランスに戻ってきてから決めようとそれほど気にもとがめていなかった。

信子の方はまさかこんな電車の中で昔知り合った人と偶然にめぐり合えるなんて。何か分からない渦の中に巻き込まれていっている自分に恐怖さえも覚えた。これからの道はこのパリの空のようなものかも知れないまるで未知数でありながら、何かわくわくするものを感じていることも真実だった。

智恵との会話はほんの数分であったが、この地に来て初めての知人に会えたことが少し嬉しかった。

最後に信子はトゥールーズで合流しないかと提案している自分がいることも不思議な感じであったが、これはもしかしたらいい機会かも知れな

いし、昔から自分の道を進み、独立した考えの彼女を巻き込むのは悪くないかもしれないとふと信子の中でシナリオのようなものが浮かび上がった。

「じゃあ、私たちはここで降りなきゃいけないから。今の話考えてみるけど、たぶん無理」横にいた娘も言葉が分かるのか首を振っているのが見えた。

「じゃあ、また電話でもしてほしいけど」あわてて信子は鞆にあった紙切れにこれから行こうとしている場所の住所と電話番号を書いて渡した。フランスに着いたとき空港の税関や警察で何度か住所を書いたので手帳を見なくとも書くことができた。

先に着いたオルリーウエストの駅、オートマチックのドアがブザーの音と共に閉まり、二人は荷物を引きながら振り向きもせず少しずつ遠ざかって行く姿を信子の目は離さなかった。



第八話、 礼子の問題

新しいページを開いたとはいえ、礼子にはひっかかるものが心の隅にまだあった。何故あの時、「治ってほしいさん」との関係をこんなに簡単に切ってしまったなんて。

あれからパリを離れラボールの近くの一軒家で今は静かに暮らしている。この家の名義は一応自分のものと言えどそれは書類上だけで税金逃れにサインさせられたに過ぎない。それとは別にいざ今の彼との関係がうまく行かなくなったときにはこの家を彼に譲ると言う一筆を公証人のところで別に書かされていた。

フランス人はそういうところにはハッキリした意思と態度を示す。

新しくできた「パックス」というフランスの制度は法律上のあいまいな財産関係を円滑にするため作られたようなもの。それは夫婦でない同棲者にもいざと言うときに遺産相続人になれる権利を保障したものだが、この法律が意味するところは同姓つまりホモやレスビヤンに対しても権利

を保障したので、一時世論で話題になったがそれでも法律として成立された。野党である社会党のパリ市長のドラノエ氏自らが自分はホモであることを公表し賛同した。日本だったらこんなことはありえない。なのにこの市長はそのあとも未だ人気を誇っている。

この法律が出来た後で、日本人女性、または日本人男性とフランス人男性の間でも、パックスの加入は婚姻よりも浸透していった。なのに結婚でもない、パックスをしている同棲というのでもない、自分の立場はいたいなんなのだろう。今一緒に暮らしている人には別れられないフランス人妻と、争っている彼らの間には幼い男の子もいる。そして、彼にはそれにもまして自分の地位を守りたい医者という職業がある。彼の妻は仕事での同僚だった。

礼子はというと、京都の美大を卒業して少しの間広告会社に就職はしたが25歳のときに大都会へ来るならいつそのことと会社の先輩の知り合いがいるパリへと簡単に考えて来て仕舞った。世界の中の芸術の都を中心に時にはヨーロッパを回って小城などを撮っては、一、二度グループ展を開いては見たが、この国で仕事を確実に得るまでにはたどりつかなかった。最初はヴォーグなどで活躍するプロのカメラマンを目指してい

たが、それだけではパリの高いアパート代も払えない。いつの間にか色々な仕事をこなすようになった。

生活のために手っ取り早いのが免税店、日本料理店、旅行社、ガイド、、、ありとあらゆるものを、ついにはアトリエの掃除まで仕事としたことがあるが、40代も近くなってきたころ、パリ大学のいわゆる国立東洋学校日本語科に入学し日仏翻訳コースを取り無事卒業して、今の翻訳会社で専属として働いてはいるが、仕事の割にはたいした稼ぎにはならない。滞在許可証は学生の身分から偶然にもミッテラン大統領が打ち出した政策で移民労働者として申請したら、なぜか簡単に10年の滞在と労働カードが降りた。

翻訳会社でベルナールと出会い、まもなくして同棲を始めたが、ベルナールは決して結婚の話は口にしなかった。彼は一度も同棲も結婚などもしたこともないいわゆる独身貴族であったが、礼子とだけは同居と言う形をとった。彼の収入は想像以上で礼子はパリの16区のセーヌ河のほとりの警備員付きのアパート120平方メートル以上で台所、風呂場が大理石という豪華なアパートに住むことが出来た。

「これ以上の望みってなんだろう。子供？」だが、ベルナールはそれを望むこともなかった。40歳を過ぎた礼子も今更と言う気もした。だがこれからのフランスでの自分の生活を守る一つ的手段になりえたことを知るすべになったのは何年かたってからであった。

ベルナールが肺癌であったなんて、早期退職年金生活者になるための最後の検診を軽く受けたとき、医者から本人を前にして告げられた。彼はまだ57歳になったばかりだった。

「相当悪いらしい」何気なく検診から帰ってきたベルナールは台所で夕食を作る礼子にそう告げるといつものように夕食作りを手伝った。その夜彼は12歳年下の礼子を抱きながら結婚しようと堅い約束した。

だがあれからわずか半年で彼は他界した。当時の医者はひと月持つかどうかと話したが、結局は6ヶ月以上も消えそうならそう多くの細い炎の命は続いた。

「あなたがいたからでしょう」携わる医者は何度もこのやさしい言葉を繰り返してくれた。

だが、そんな慰めは何の足しにもならない。

約束は守られなかったと同時に、礼子にはベルナールの家族による嫌がらせが待ち構えていた。彼との子のいない自分に対して結婚したこともない以前の婚約者には30歳に近くなった息子までいたのだった。今住んでいるアパートは使用权と言うものが行使され、この先老いて死ぬまで住むことも出来たが、彼の息子とその母親が礼子を追い出すためにあくまで法律上で争うと向かってきた。しかもアパートに掛かる費用はいくら家賃を払わないとしても、不動産税、住民税、チャージまでありとあらゆるものが想像以上に掛かることが分かった。物件を売ることの出来る息子にとっては礼子は目の上のコブ以上の存在にしかない。何度も電話でそれとなく立ち退きを迫る息子にも閉口していた。

「わずか一週間と言うのに、もうお金の話、うんざりするわ」何度も今ではなくてはならない人となった担当医であるジャン＝ピエールの前で話しているうちに、彼からの同居の誘いが始まった。

「僕と一緒に住まないか。そうすればこんなことで悩む必要もないし、実を言うと君に住んでほしい家がある」

彼の強引さにはあきれ返ってはいたが、長期滞在許可証と労働許可証は確保したといえど、これからこの国の国籍のない異邦人が他国で住むことなんて保証するものでもない。この年になって、アリとキリギリスの話ではないが、何も蓄えてこなかった自分のミスと言えそうかもしれないが、フランス人を鼻で動かしてきたようでありながら実は自分への補償は何もしてこなかった。むしろ従順なまま過ごして来たに過ぎない。

しかも、彼からの約束の結婚も病気が治ってからなんて、夢のようなことを考えていたに過ぎない。現実はそんなに甘いものではなかった。結局一切の書類を作ったわけでもなく彼は自分ひとりを残して誰にも何も告げず他界して行った。

「礼子、ありがとう。好きなように生きてくれ」と言う一言だけ残して。だから生きてやる。人が目の前で死んでいくのを経験した人間は強くなる。悲しみの涙は不思議にほんのわずかな間だけで止まった。これが八年もの人生を共にした人への忠誠だろうか。礼子は頭の中で小刻みに自分をあざけ笑うように口元に笑みを浮かべた。

そしてベルナルがなくなってから2年後、彼の母親がすい臓癌で亡くなった。

彼女もまたパリジャンらしく、このラ・ボールの海辺に70M²の海が見えるアパートを持っていて暮らしていたが、殆どあれから逢う事はなくなっていた。年に4回クリスマスと誕生日にプレゼントを贈り、どちらからかお礼の電話が入るといふくらいの付き合いでしか国籍の違う義母（そう呼べるだろうか）との間に残っていなかった。子供でもいたら少しは違っていたのかも知れないがとふと思う。でもきっと同じではないだろうか。最初から彼女は日本人である自分を認めてはくれなかったが、ベルナルが病に倒れてから急速に彼女は日本人妻を頼りにし始めた。礼子もまた、そんな義母がいとしく思えて急速に仲がよくなっていったが、二人の義姉はそれを好ましく思わなかった。幸いにもパリのアパートはジョン＝ピエールの忠告で一部使用権が生まれ彼女はそれをお金に替え息子に明け渡すことにしたのだった。2年間の裁判は長かったが未だに終わってはいない。そんな中、義母の死は礼子にとっては悲しい出来事以上にまた、何か法律的な手続きごとが始まる予感がしてならない。

＊

5月の晴れやかな日に彼女のお葬式が行われた。義母のアパートからわずか5分ぐらいの静かな住宅街の中にサンテレーズという教会があった。住宅と松ノ木に囲まれたその教会は四方から誰でも入れるようにガラス張りの大きな扉で教会には珍しい低い天井で作られていた。きっと住民の反対で高さが限られたのだろう。

礼子が一人で10時に東側の入り口に着いてたたずんでいると何十人かの人たちが集まってきた。ジャン＝ピエールも礼子を気遣って参加したいと言ったのだが、礼子は頑なに断りこうして喪服の衣で立ちで立っているとサングラス姿のステファニーがその前を横切り、あるご夫人に挨拶をする。後を振り返ってやっと礼子に気付いたかのように頬を突き出して挨拶を求めてきた。

「元気をだして、ステファニー」礼子がそれだけを言うと返事もなく別の陳列者のほうへ駆け寄っていた。

みんながあちらこちらで挨拶のキスをしている。だが、喪服姿は礼子一人で他は普段の格好だった。

礼子はマリオを見つけて近づき、同じことを言った。マリオはステファニーの旦那でポルトガル人なのかやはり彼も一人何故か礼子のように浮いていた。

「初めてフランスでお葬式を経験するんだ」高揚した頬のマリオの言葉は礼子に身震いを起こさせた。

そういえば2年前、ラ・ボールにしながら仕事があるとベルナールのお葬式をサボったことをふと記憶が陰る。

棺の横にはわずかな花が置かれ、長い白い服を着た背の高い神父の話と賛美歌が始まる。礼子はバッグからベルナールの写真を出し、涙と共に棺の前に行き、花びらをその上に置く、何と言う貧弱な棺だろう。礼子が送った花束が一番大きいように感じられる。82歳、花木を愛し、ベランダに花を切らすことはなかった義母の最後にしては献花はほんのわずかであった。二番目の義姉、甥や姪たちが礼子に気付いても話しかけて

くることはなかった。礼子は本当に一人だった。でも今日ここへ来たのはベルナールの代表としてそして義母への祈りのためだと自分に言い聞かせた。

義母はその後、サンナザールにある火葬場で焼かれ、再びラ・ボールエスクブラックの駅の裏にある墓地に帰ってきた。

墓地には大きな墓石が壮大に並び、いくつもの花束が置かれている。義母をステファニーたちがこの墓地で散骨すると決め、家族の前で片隅に設けられた散骨場に集まると芝生の上に彫られた直径1メートルぐらいの円筒のセメント管のようなものに網が載せられ、その上に置かれたいくつもの丸い石の上に、葬儀屋が持ってきた銅で出来た水筒のようなものをかざし、上でスイッチを回すと筒から義母の遺灰が落ちていくというものだった。

終わってしまった。皆はそれぞれ帰る準備を始めている。

礼子はこの日を待っていた。ベルナールの灰を義母のそれと混ぜて一緒に眠らせてあげようと、この日を持ち続けベルナールの遺灰のふたを開けたのだった。

昨年1月1日からフランスでは法律で遺灰を勝手に海などへ捨てることも、自宅で持ち続けることもならぬという法律が制定されていた。だが礼子は未だに彼の遺灰をそっと持ち続け今日を迎えたのだった。

みんなが振り向いたスキに礼子はビニールの袋に入れた少しの遺灰をその上に分からないように重ねた。

「さようならお義母さん、さようならベルナール、これでよかったんでしょう」

口に出来ない心の呟きを何度も口の中で繰り返した。

「残りは大西洋の海に眠ってください」

ベルナールがなくなったときステファニーはパリに来たが色々手続きをするのでもなく、礼子にはすぐに遺灰にするように求めたもののお葬式費用を分担するでもなく、勝手にお葬式を決めて帰っていった。礼子には考える時間もなくいつの間にか家族からは焼くものだと言われ礼子に求めていった。

今考えればあれはどういうことだろう。同棲妻である自分が何も決めず、指示だけされて一銭のお葬式代もなかった。その時礼子はせめてと最高の棺を買い、最高の花束を飾った。火葬場は入りきれないほどの人と花、涙で一日が終わった。

今回のように涙があまりないお葬式はどこか逆に寂しい。まるで簡単な儀式が形式的に行われたに過ぎない。見栄で行われた教会での儀式。義母はもう 30 年も前から教会へは入らないと決めていたにも関わらず何故ここで行われなくてはならなかったのだろうとふと思った。

あれほど元気だった人がこんなに簡単に逝くだろうか。

「礼子にはママンのアパートは関係ないからね」耳元でステファニーがつぶやいて近くに止めていたベージュ色のプジョー406 に乗ってマリオと去っていった。

その日礼子はラボールの海をずっと見つめていた。これだけ広い浜辺が他にあるだろうか。白いさらさらの砂、近くには白い帆をつけた何隻もの二層式ヨット、カタマロンが置かれている。右側にはどこまでも続く

浜辺が霞むほど見え、右側には浜辺に出来たカフェなどがテーブルを出しているが椅子には誰一人として腰掛けている人もいない。静かな海、そしてブルー調のパステルカラーの空が少しずつ赤く染まるのをじっと見つめていた。

「こんなに綺麗だと今まで気付かなかったわ」礼子は叫んだ。

浜辺を上ると歩道がどこまでも続いている。そして10メートルおきぐらいに固定された白いベンチ。そこでも立ち止まり礼子は一人座り泣いた。週末には賑わうプラージュも今日は火曜日、人はいない。何度ここへ来ても礼子はこのスノーブな義母の浜辺が好きになれない。

日本の砂浜のような海藻の匂いもない、潮のざらざらもない。ましてやマンションのように反対側の歩道にはアパートが立ち並び、揃い、白く美しいというのに。なんと寂しい浜辺だろう。もうここには二度と来たくない。

礼子は全てを捨てここを離れる決心を一人でしていた。

＊

「酔っている」三杯目のポートワインを食前酒として飲んだとき、礼子はそう感じた。横にいたジャン＝ピエールの横顔がなぜかベルナールに代わっていた。

「ねえ、どうしてあなたは死んだの」

「たかが肺癌じゃない、片方を切ってしまえば治るはずなのに」

「ねえ、どうしてって聞いているのよ」礼子とはとてつもない意味の分からない質問をサロンのソファでくつろいでテレビを見ている肩幅の大きいその人にした。

「礼子、何を言っている」テレビの音を小さくするためにリモコンを探し始めたジョン＝ピエールに持っている手を伸ばしてもう一度尋ねた。

「聞ってるのよ。どうして殺されなきゃならないのかって。あなたがやったんでしょ」本当に頭がふらふらだと礼子思ったが、でも酔いが冷めて来るのも早かった。

「君は酔っているんだ。僕が誰かを殺したって。話にならない」それでも彼は独り言のように続けた。

「殺したと言われれば確かに今までに何人殺したのだろう。因果な商売だよ。誰にも認めてもらえないんだ。でも、確かにあのトゥールーズの病院では、、、殺したかも知れない」横にいる礼子が眠りについたのを確認したとき、独り言のように声が出た。だが礼子は眠りについてはいなかった。むしろ鮮明になる頭の中で、殺したっていったい誰を、、、いつなの、、、どこで、、、何故、、、何を言っているの、、、その疑問に身体が硬直していくのを感じていた。(つづく)……